

コ ラ ム

主要先進国の科学技術研究費

本統計は 60 年版科学技術白書の数値及びその後の調査、公表された新数値より集録されたものである。

科学技術会議 12 号答申は、基本方針として“創造性豊かな科学技術”を目指し、次の時代の技術を育む基本的土壌を培う基礎的研究の強化の必要性を述べている。

我が国の研究費を諸外国のそれと比較したものを表 1 に示す。日本の研究費の総額は年々上昇傾向にあり、米国、ソ連に次いで第 3 位である。研究者一人当たりの研究費は、ソ連を除けば、諸外国に比較し少ない。また、我が国の研究開発投資は 4 分の 3 以上が民間負担であり、民間の研究活動が活発であることを示している。民間活力を生かし、研究開発の進展を目指すことが、今後ますます期待され、行革審の答申にも

(国際比較) 表 1 主要国の研究費

国名、年度	項目	研究費総額	対国民所得比	研究者 1 人当たり 研究費	政府負担割合	国防研究費を除いた 政府負担割合
		百億円	%	万円	%	%
日 本	57 年度	588	2.71	1 784	23.6	23.1
	58 年度	650	2.85	1 900	22.2	21.7
	59 年度	718	2.99	1 939	20.8	20.3
米 国	1984 ※	2 278	2.94	3 072	46.6	28.8
	1981	265	2.65	2 416	47.7	25.9
イギリス	1983	435	3.20	3 175 ('81)	42.3	40.0
	1984 ※	258	2.38 ('82)	2 847 ('83)	58.0	46.2
西ドイツ	1981	806	4.74	560	—	—
	1983	—	—	—	—	—

- (注) 1. ※は推定値。  
 2. 諸外国には、人文・社会科学系が含まれている。(ただし、イギリスの研究費総額は自然科学のみ。)  
 3. イギリスの研究者数、研究者 1 人当たり研究費は、産業及び政府部門の値で大学及び民間研究機関は含まれていない。

表 2 主要国の研究費の性格別構成比

(単位: %)

国名、年度	区分	基 礎	応 用	開 発
日 本	57 年度	14.1	25.9	60.1
	58 年度	14.0	25.4	60.6
	59 年度	13.6	25.1	61.3
米 国	1984 ※	12.6	22.1	65.3
	1981	6.3	24.0	69.7
西ドイツ	1981	18.8	81.2	—
	1979	20.9	33.0	46.1
日 本 の 訳	59 年度	13.6	25.1	61.3
	会社等	5.6	22.0	72.4
	研究機関	13.1	30.4	56.5
	大学等	54.9	36.6	8.5

- (注) 1. ※は推定値。  
 2. 西ドイツは民間研究機関、イギリスは大学を含まない。

述べられている。

表 2 に研究費の性格別構成比を示す。先進各国にそれほど大きな差異がないことはおもしろい。どちらかといえばフランスの基礎的研究の比率は高い。日本の内訳の項の“会社等”の中には国鉄や日本電々公社の研究機関も含まれる。“研究機関”の開発研究費が意外に大きいのは、原子力研究や宇宙開発研究等がこの範疇に入るためであろう。

基礎的研究にかかわる産学官の研究交流は、今後いつそう促進する機運にある。研究費の配分やリスクマネーの供給等が今後の課題である。

人間及び社会との理解と調和を持った科学技術の進歩が、国際協調の下に行われることを望みたい。

(金属材料技術研究所 大河内 春乃)

編集後記

編集委員を担当することになってからもう 1 年になります。はじめは、毎月の編集会議に欠かさず出席していましたが、ここ 2、3 か月は多忙なこともあり、欠席がちなのが気掛かりでありました。そのような折、協会より編集後記の執筆の依頼があり慌てて筆をとつた次第であります。良い機会なので、査読原稿を読みながら感じたことを述べてみたいと思います。

その 1 は、題名のつけ方のまずさであります。投稿規定にふれる略字、固有名詞を冠した題名や企業内の技術検討会等に出したと思われる十分に練られていない題名が散見されます。論文の題名はその論文の顔であるはずなので、よく考えたものにしていただきたいと思ひます。

その 2 は、考察が不十分であることです。これは多くの編集委員が共通して感じていることと思ひます。現象の説明に終始し、考察が手薄になっている報告が

見受けられます。考察は論文の最も重要なところであり、命であります。十分に検討を加えた論文にして提出していただくよう、御努力、御指導をお願いします。

その 3 は、図、表および文章の不完全さであります。提出された図、表等に誤字や脱字および配列の不適正な箇所が多く見られます。査読をしながらその都度訂正させていただいていますが、このようなケアレスミスは読む人の立場に立つてやれば容易に見出されるものです。図 1 枚、表 1 つについても十分検討した上で提出していただきたいと思ひます。

以上読者の中には、耳の痛い人もおられたかもしれませんが、これも新しい知見、情報をできる限り早く多くの人々に知らせたいという一編集委員の気持ちの発露であると御理解いただき、今後は十分に推敲した、誤植のない原稿を提出されることを期待します。

(M. K.)